

今古
雅俗

石亭畫談

竹本又八郎編纂

初編上

手多4

34

1



門 4
號 34
卷 1

竹本又八郎編纂

令古
雅俗
石亭畫談

對松堂藏梓

奇

對松堂藏梓

廣東省立圖書館
香港分館

奇者。非聖門之所貴。然。正
而奇者。為聖門之類。豈不
奇乎。孔子曰。原亦此之
定也。夫畫畫以奇為原。原
怪之。原而奇者。也。周財。畫。

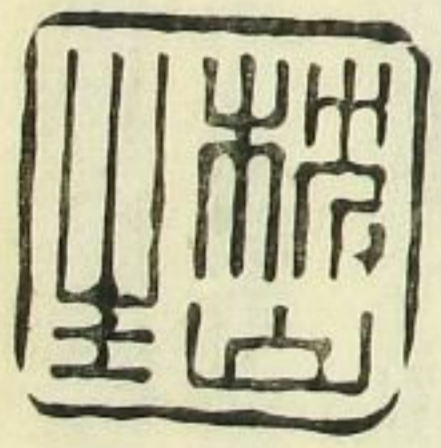
大召亭

之。考。考。考。也。王。孫。薛。程。神。
不。考。考。也。至。子。宗。則。李。伯。
時。王。句。考。考。也。文。之。句。大。
家。考。考。考。考。也。明。之。得。得。
考。考。考。考。考。考。考。考。考。
考。考。考。考。考。考。考。考。考。
考。考。考。考。考。考。考。考。考。

考。考。考。考。考。考。考。考。考。
考。考。考。考。考。考。考。考。考。
考。考。考。考。考。考。考。考。考。
考。考。考。考。考。考。考。考。考。
考。考。考。考。考。考。考。考。考。
考。考。考。考。考。考。考。考。考。
考。考。考。考。考。考。考。考。考。
考。考。考。考。考。考。考。考。考。

古為余之老友。辨本鐵石。
字訪於余。池九如。史為余
之。家妹。之。亦。付。取。如。呼。
呼。查。家。之。音。於。此。編。為。
來。矣。書。家。之。音。誰。能。集。
之。以。嗣。此。編。而。為。一。部。

之多。書。者。所。朱。為。待。其。
人。云。甲。申。誼。者。所。
樓。山。史。撰。於。下。名。臣。
堂。中。



大召亭

三

第二回内國繪畫共進會に石亭画談艸稿を以て出品す左の褒賞あり

褒状

東京府

竹本又八郎

今古雅俗石亭畫談ヲ著スノ
篤志ヲ嘉賞ス

明治十七年五月廿日

農商務卿正四位勲一等西郷從道



今古雅俗石亭畫談

凡例

此石亭畫談の編を為に也其始或人の爲に畫家名流河成金岡雪舟元信大雅蕪村輩の逸事採擧て廿有四圖を作り并せて讚文を綴りてこれを書一帖と爲て或人より與ふ當時春木南溟も余が交友中の老畫師たるを以て畫帖の題字を索む南溟取見て喜て曰此舉甚好願くも尚これより數十畫人の逸事を加へ一編を成さば尤妙也請務て其稿を起せや余意らく畫拙文劣其稿編を為にやも誰りて是を見んやと敢て其言を

隨うに未曾て稿を起さざるもの久し其間南溟も又己に
没して茲に年あり然れど余弱冠雜書哉見るに事跡
此繪事と係るものこれを抄録し街談巷説も亦繪事
と及ぶものハこれを記して雞肋と屬し今や紙魚の巢
やちらんとするもの若干あり近時友人田中周榮者
其雞肋若干の書哉とて亦此編を集成せん事を勧む
其勧めや昔時南溟の厚志やを追懐して終に拙劣を
顧び今此編をぬに也由て其緣故を記に

一此編畫談を以て名とに元より談より傳に非に故
と畫人各家の生國享年師傳の受授等の事こときを詳

とせざるものあり但見聞に隨て大略を志するもの各
家別號多きものハ其繁雜を厭ひ省もよきと多く

一此編各家の事跡を記するに古今を順序せば雅俗を
分るべし只事跡の類似を以て假に題字を設け韻礎を
推して順序をなすは是偏に各家此事跡を搜索するに
便なるを旨とちるに也蓋其便を旨とちるもの古今を錯
亂するの疎ちる哉購んんとするが為也編中近人の事を
のすといふ共決して現存人の事を載せば蓋美事を述て
阿諛と屬せん哉恐き醜事哉言ひ忌諱と觸ん哉憚る
故にこときを記せざる也稀に現存人の名哉掲ぐるも其

人の師其人の父等は談話に係るもの僅は是を記るに
而止

一此編專畫人の事蹟を記し且畫家専門の人を非と
雖其談繪事に係るものハ文武將哲儒高僧其他有名
諸人の事及然れが其専門家を非ざるもの事蹟繪
事は關せざるものハこれを記さば畫家専門の事蹟を
繪事外にわさるものもこれを取て編中を収む

一畫人一人として逸事多きものあり雪舟元信一蝶大雅
應舉文晁等の如きは是れ二條三條に別ち揚ぐ猶蒙求
傳子子房取履ありて張良燒櫟あり孔明卧龍有る亮

遺中悞あるが如きなり其二條或ハ三條に舉るもの初
掲ぐるに小傳を記し次に掲ぐるものハこれを略して只
前條の記事の遺漏を補ふものと然るる類似の談を
列するに順序の便宜ありて再前後其位置を換るもの
あり因て初の條に疎うて後に細ぬるものあり甚次第
を失するに似たり看人請これを恕せよ

一或畫に於ける其名高き土佐光信狩野尚信が如きも
其談柄を聞得ざるものハ記すに由る今也余が稿本舉
る所の畫人其談話五百餘人及といへど有名大家とし
て其談を洩すもの猶數百人あり四方の諸君子畫家の

逸事此編に入べきものを了知せられんは偏に報知せらるる人を切に希望する所也

一此編初稿を起すは漢文を以て然れど淺學陋識にして湯の惡文を作らば其意の通せざらんを恐れ且和歌俳句或は俚言俗談を記するに至りては俗文却て便なる哉おもひ國字漢字交へ記すものとあはれ故に文章漢文を譯せる如きものあり俗書俚談に就て其儘たるにものあり文體甚紛雜を看る人又これを恕せよ

一編中各家肖像を傳ふるものたゞきを謄寫し或は是れ縮摹しあはれ載せ敢て私意の杜撰を加へざる也其他

圖をふむ者ハ一時の寓興に於て據る所なく又法とする處なく然も湯然是を圖に上せしものハ田中周榮の勸よよりて童蒙の觀に備るのつ余元より有職故實の學の朝代の衣冠を誤るの類極めて多かるべく古書の引用或傳聞の雜説も亦誤謬少からざるべしこれを人々これを背誣せざりて直に其非を示さるるを得ば幸甚

明治十有七年春日

石亭竹本興識

雅俗石亭畫談初編目錄

卷之上

歸和賜姓	男龍	譬鼠未化	<small>山口雪溪 慶山</small>
入華馳名	僧雪舟	擬螺傳聲	木下逸雲
墨梅結契	女玉潤	竿頭縛筆	僧鸞山
白雪動情	藤原忠季	癸下重枰	前川雪旦
一萬無闕	僧雲室	城外停轡	立原杏所
五百為全	伊藤若仲	林中展瓊	春木南湖
方切安道	飛彈守惟久	馳譽萬里	鞍作部鳥
比妙黃筓	圓山應舉	傳美千年	染殿后

僻意嫌嫁 小池池旭 擘冊上廁 土井擘牙
 傲志撰婚 櫻井秋山 開扇代禪 櫻間青涯
 累歲隱几 皆川淇園 睡者無答 吳春
 多年杜門 徐夙夜 死者不言 司馬江漢

卷之下

鬱悶絕舌 田中訥言 特著衣冒 藤原為久
 憤懣殺身 狩野融川 常蒙手巾 狩野素川
 憐兒屈節 諸葛監 專心撫古 鼎春岳
 愛子反真 狩野探幽 要意知新 僧抱一
 鼻上火字 新井白石 深夜染翰 村瀨秋水

眉間白毫 高田敬甫 早曉試刀 椿椿山
 好裁縫態 香川氷仙 茄子示侈 英一蝶
 嫌繕綴勞 江馬細香 羆皮見豪 高麗繪師磨
 換技互學 松尾桃青 九刀何史 高嵩谷
 鬪藝替題 森川許六 二喬誰妻 佐久間洞巖
 夢談蘇岳 服部南郭 形巖一尾 加藤鄰松
 老遊熊谿 野呂介石 像馬三蹄 僧周文
 吏疑盜賊 長谷川雪旦 二史梅竹 等春
 侯認牽頭 十時梅崖 兩公馬牛 山本梅逸
 添鑷償過 津田休甫 示元艦覆 後京極良經
 浮田一蕙 普賢寺基通

辨樹防尤	高隆古	察洋舩浮	渡邊華山
力仿道子	狩野惟信	一卷携旅	狩野探幽
何異駿之	吳俊明	兩笈備羈	釧雲泉
戲墨懲吏	僧覺融	一坐齊笑	金井烏洲 菅井梅關
漫筆諷師	久隅守景	再會共嬉	高久靄厓 田能村竹田

今古雅俗 石亭畫談初編卷之上

歸和賜姓 男龍

石亭竹本興著

男龍一名ハ辰貴魏文帝齋也雄略帝ハ朝我國ハ歸化に
 武烈帝其丹青此妙を賞姓を首と賜ふ五世の孫勒大壹
 尊訓未亦繪を工ふて天智帝姓を倭畫師と賜稱德帝
 亦大岡忌寸と賜ふ武烈帝より後稱德帝ハ至二十四朝
 子孫宗族皆畫名あり事姓氏録の要を摘む興曰抑画工
 の史ハ見ゆるもの男龍に始る然則男龍ハ真ニ吾邦の畫
 祖也此藝ニ遊者男龍を以て尸祝して可也



我國初知畫

天皇世好之此時先賜姓辰貴建其基

甲申之春 竹本興寫并題

○興曰日本紀雄略帝之時畫部因期羅我カと云もの有
適男龍と時を同と其孰か先孰か後なるを不知同書小
推古帝始て黄文畫師山背畫師を定む孝德帝時伯
豎部子麻呂鯽魚戶直佛像を畫て時名有用明帝
時百濟の畫工白加日本カ至る續日本紀小畫師押勝姓
を改て倭繪師とちり養德畫師楯戶辨磨カ從五位下を
授く等の事有て往古昔の畫人國史中カ列せり

入華馳名僧雪舟

雪舟俗姓ハ小田名ハ等楊備中人也幼時其父これを僧
やちり其國井山の寶福寺小居らむ畫を好て經卷

滴淚描巖假逼
實見為真物衆
人驚精神
所注補女
妙不似頼
豪嫉妬情



を讀小忘る師僧怒てこれを堂の柱に縛る涙堂板に落
つて至ると雖偏癖猶止寸足の大拇を以て落る所此
涙を引て鼠を畫く鼠忽奔走を師僧其妙小感これ
より畫事を禁せむと長くて明國に遊び四明天童寺禪
斑第一座やなる曾て明帝の勅ふよりて禮部院の壁に
畫く一座歎服を國守寶とありて救命あるに非れば他
の畫を描く事あらざる遂に大に名を中華に得て獨雪
舟の榮よあらざるて日本の榮と云べし

壁言鼠未化 山口雪溪
慶山

山中人饒舌よ云京師の雪溪長崎の慶山二子初め雪舟

我學ぶ資質穎異建囊の日久くして文運漸隆ちり是
が為ニ薰染鎔化せりト大ニ解悟する所あり竟ニ舊習を
脱シ直ニ宋元諸家を法トとシ然レやも所謂仙巖食丹而未
全化者也

○雪溪姓ハ山口號ハ梅庵雪舟及牧溪の畫を愛シ自レ雪溪
と號スと云享保中の人也白井華陽曰當年畫匠の心目探
幽の爲ニ壓セせりレ意を古ニ求フ徒ニ皮相を襲ヒて精髓を
遺る伊年光琳ハ宗法ニ拘ワらズ雪溪獨前蹤ヲを追テ時習
小染ハ亦英士トぬラびヤ

○慶山ハ元平安の人徙リて長崎ニ住初狩野の流を學後

其格を改む

擬螺傳聲 木下逸雲

木下逸雲名相宰字公宰逸雲ハ其號又物ト子養竹山人と
云晚年如螺山人や號ス世ニ長崎ニ在官シてハ名ヲ館トり
書畫俱ニ董玄宰を法トとシ慶應年間江戸ニ下る其友藤
堂凌雲を訪凌雲話次其如螺と名づくる所謂を問逸雲
曰余近時人の為ニ畫を帆足某ニ索フ某曰一紙ヲて金
三兩の謝金ヲあらざれば畫ラばと余一日書を致シて是を
詰テ曰京師の畫人竹洞梅逸岸駒海僊輩生前其名高ト
て多く潤筆ヲ得テ死後無價ハ豈耻スる所ニあらざや先

生の畫後世果して價を増や否やと余故に潤筆の幾許に
關せざ只意の向ふ所を任せ寫し人との與ふ然れども死後
果して價を加ふべし蓋螺貝も死後翻て聲を發す余
是を思て自如螺とちよと云へり逸雲江戸より歸路を
海上より取る風波の會し船破て終る時年六十八

○春徳寺鐵翁ハ逸雲の通家也其交兄弟の如く是故に画
哉逸雲の學ぶ者ハ又事を鐵翁の問ふ鐵翁の學者又逸雲
の問又聞逸雲ハ早筆鐵翁ハ遲筆也と逸雲死後長崎にお
いて遺墨展覽の會を為せるに其出品三百餘幅といへ
ど一も同圖なりと云所謂胸中丘壑の富むものや云へし

○逸雲篆刻の工よて詩及和歌又妙也和歌ハ中嶋弘足の
學ぶ墨林今話中逸雲の小傳を記して甚美賞せり其海
外の名ある如斯 其自畫牡丹 天然國色冠羣芳富
貴花開墨麝香亭畔苔青風日好數杯傾盡到斜陽
雨中鷺かきくらく降く雨の田の面より數ありけれ
て鷺の立見ゆ 題ありば 一筆の墨繪おちえて唐崎に
松より上よりあふ釣舟門人川村雨谷現存時名あり

墨梅結契 女玉潤

玉潤ハ北總水海道驛の畫人小林藏六の妻なり元徳川旗
下士の女と云故有て落魄驛中酒家の婢やちれり藏六



初此家より来て飲み扇を取て墨竹を寫さ玉潤曰願はくは
 一筆を加んや忽毫を揮て一枝の梅を補添さ藏六是を
 見るに筆致秀潤驚くる且もこより玉潤容色あり藏
 六心是が為み動き即ち金を出して酒家の主人に投じ遂
 み納て妻とちきて夫婦終身畫を以て樂とちきて夫此行
 や必倍從して側を離れ其死するまで及で藏六再妻をとむら
 へび其翌年期月又病て没す時明治十有三年也玉潤能
 琴を弾りまゝ和歌を能す

白雪動情 藤原忠季

藤原忠季嘗て法性寺の執行能女督典侍の國色あるを悦

雅俗 石亭画記 卷之四

多身戀著屬挺君
 為寫江山妙出群
 名畫展來情思動
 雪中為雨
 又為雲
 石亭寫
 併題



び多年これを挑いへ共不應一夕雪積る尺餘此時自
 雪景を畫て是を督におくる督取て是成て其畫の工
 妙子感し始て情を動一雲雨の契成結び遂ふ少將親平
 を産や云晉顧長康隣女を思て其容を寫一其中心は釘
 うつ女心痛むおれを長康は告ぐ長康其釘を抜去れば乃
 愈もこれより始て情を通じや云これらの事よよきば
 繪事ハ赤繩の縁を引くものか好男子つとめて畫を學ぶも
 可ちらんら呵く

竿頭縛筆フ僧鸞山

鸞山ち淺艸誓願寺の僧也書畫俱ふ能き初畫を櫻井雪

今古二部画史 卷之二 七

關子學び後明人の遺墨技法として別家をして為す晚年
縦放姿逸繩墨に拘泥せざり曾て某寺の仰板に蟠龍の画
を索む鸞山即筆を以て竿頭より縛り付手を伸てこれを
畫く勢飛ぐ如くと云華頂山の支院に鸞山畫く所の寒山
拾得の圖有り手を垂て殆地より其規矩を事と不為
氣概見るべしと云

癸下重枰 前川雪旦

前川雪旦名ハ良顯平安の人也洛東要法寺仰板に畫龍
を其遺墨也相傳ふ雪旦一日此寺に飲は醺酣興至り棋
枰を重ね其上に癸を載せこれに登り仰いて是を寫し

或曰同時東都の僧鸞山竿頭より筆を縛臂を伸て是を
畫く是轍を異りして趣を同うして是皆一時の戲事のみ
嘗鑑家の尚ふ所ありざる也 興曰此論真ふ然り然
れども徐邈足拇を以て鯖魚を寫し王墨頭髮を濡し
物を畫くの類皆歷くのせて畫史ふあり畫中の一譚は備
ふべし

壹萬無闕 僧雲室

僧雲室名ハ了軌字公軌拳石小子と號す江戸西の窪光
明寺の主僧也其先信州長沼真宗光明寺に生る嘗て
自心に誓ひ日課をすて一萬の尊者を寫出せんと欲し

其數竟ツヒ萬ヲ及ベリ所謂尊者八本邦古今高僧及忠臣孝子賢宰武將文學術藝特絶の者を指サシ也尊者の畫今散逸ト完クのらハ第二千より以下百餘紙神田ノ町田上氏主舊名ヲ藏セリと云其畫一紙中像を寫せる二人或ハ三人アリて其側各々ノ名と何號とヲ記す其他の殘片も猶四方各家ニ存在スと云興曰余喜ビて古賢前哲の圖を作る聊世間風教ニ補有ラんと欲するの微意ヲり雲室ノ夙ヨ此舉キあり真ニ追慕スとベまシのち文政十年寂七十五

○金井烏洲曰詩人不畫人ノ不詩雅中の遺憾也雲室

道人ノこれヲを歎シ嘗テ小不朽社ヲを唱ヘ當時訂盟の者桐君蘭石平梅溪源臺山邊赤水等ト輪流シて主トちり盛ニ詩畫の會ヲをホちシ是ハ小繼グもの西圭齋野西湖栢如亭の諸人ナリ余弱冠此會ニ交リ略其カ盡サ簪ノの盛事ヲ哉記セるヲ興曰雲室意ヲを竭シ無聲の詩ノとチらシて有聲の畫ニ勞シと云ベ又曰曾テ雲室筆記一卷ヲ哉シるニ當時の文士雅友の事跡ヲを記シて最深密也

五百為全 伊藤若仲

平安の人伊藤若冲名ハ鈎字ハ景和畫ヲを好ミとシへど終身龍虎鬼神の類ヲ畫ク常ニ鷄數頭ヲを飼ヒ晨夕其飲啄

の状態を伺ひこれを寫す然きども形似を事とせざる
意を傳神小畫を遂に鶏を畫くを以て世に鳴る晚年隱居
して深州石峯寺の側に住し畫を以て米一斗小のて生計
を營む故に斗米庵の跡あり畫乘要略に云若冲嘗て
五百羅漢の石像を彫鑿し是れ石峯寺の側に置く其像
亦擬肖を務めば風致饒し存して今に傳ふとあり興近
時伏見に遊び百丈山石峯寺に到り親しく寺中を睹
る小本堂の右小高き所の小樓門あり漸次山に升る
に其石像獨五百羅漢に止らば彌陀三尊觀音地藏釋迦
誕生及涅槃其他諸佛獸畜等盡くこれを山間樹隙に

點續し位置經營をちして東西南北に布列せ且若冲の
墓あり墓に側更に一碑あり是貫名海屋撰文の若冲
の小傳也すべて一奇觀と云べし惜いのちこれを保存す
る小意を用るものあく苔蘚剝蝕或ハ破壊し或ハ崖下に
轉落するもあり散失も亦疑なきも非る也寺に入り主
僧と話を主僧曰寺資力乏しく是を保存するあた
らざる共其荒廢をつくを歎いて別る寺に石像諸佛
布列の圖木板刻し信者の為しこれを施す山中精一
後書する所の詩亦載て圖上あり其詩云斗米先
生有畫才披雲彫石像奇哉峯頭活潑發靈氣五百

雅俗不異 畫言 卷之十一

成群羅漢來、其圖實小若冲七十五歳の筆也好事の士必寺に詣て石像をこて其奇なるを知るべし寛政二年没歳八十二禪法を黄檗伯珣に問と云

○若冲も西洞院青物問屋の主也故に戲に菜蔬を連て釋迦涅槃の圖を作る蘿蔔を以て釋迦像とちり牛房胡蘿蔔瓜茄子等の類を以て或菩薩とちり或羅漢とちり獸畜禽鳥とちりて壹圖とちりて圖格尤奇と云此畫今京都誓願寺の什寶とちると云

○若冲一日感悟する所有て忽ち平日摹に所の稿本を燒捨て別々寫生の真面目を開くその筆を下は鶏より創と云畫徵録に曰周覽字元覽童時其摹は所の古圖藁本を取り日これを焚て曰畫は須く手眼よりすべし何ぞ前人の蹤を襲はんやや畫く毎に花を對して生を寫す若冲暗に此意に合す

○興又西京に在る時若冲畫く所の六大幅を博覽會中に觀る其筆法不和漢光琳にあらは應舉に非は其中間に出入して彩色鮮麗位置結構盡く人意の表に出づ此幅相國寺の什寶にして三十六幅對のうち也近年洋人某此畫をこて大に是を愛し購はんと請はるが寺主是を聽たりきと云興毎に若冲の行狀及圖畫を見聞

雅俗石亭画記 卷之十一

する子其逸韻常人に類せざるに感あり故に其事を記する特小意を加ふ貫名海屋の書ける碑文の如きも猶是を得て追加せんや欲する也

城外停轡 立原杏所

立原任字遠卿號杏所任太郎を稱す水戸藩士也人となり廉潔にして深く藩主烈公の恩遇を受く學博く書畫及古器等の鑑定を能く又丹青の名あり畫風屢變は晩年の作殊小雅とちなり一日西城下において町奉行筒井肥前守此項を伊賀守と逢二人鏢をひらへ共馬上下に在て語る筒井の從士立原の馬上にあるを以て其不敬を責ん

とす筒井曰彼ハ文人也宜しく方外を以て交るべき也と水府ハ徳川氏の連枝といへども當時宗家枝流と尊卑甚其禮を異にする也杏所顯者為に重せらるる如此天保庚子五十六年にて没す

○杏所同藩士大久保今助時權勢ありて家富む曾て人魚を喰へば命長しを聞く適人魚を驚者あり今助七十五兩を擲て是を購ひ豫て杏所が鑑識精しきを以て真偽の審定哉請ふ杏所一見して大に驚き奇也と稱して止ば今助大に喜ぶ杏所又取てこれを觀又置て是を考へ久しう志て奇を稱するの聲漸く止む終り默然と

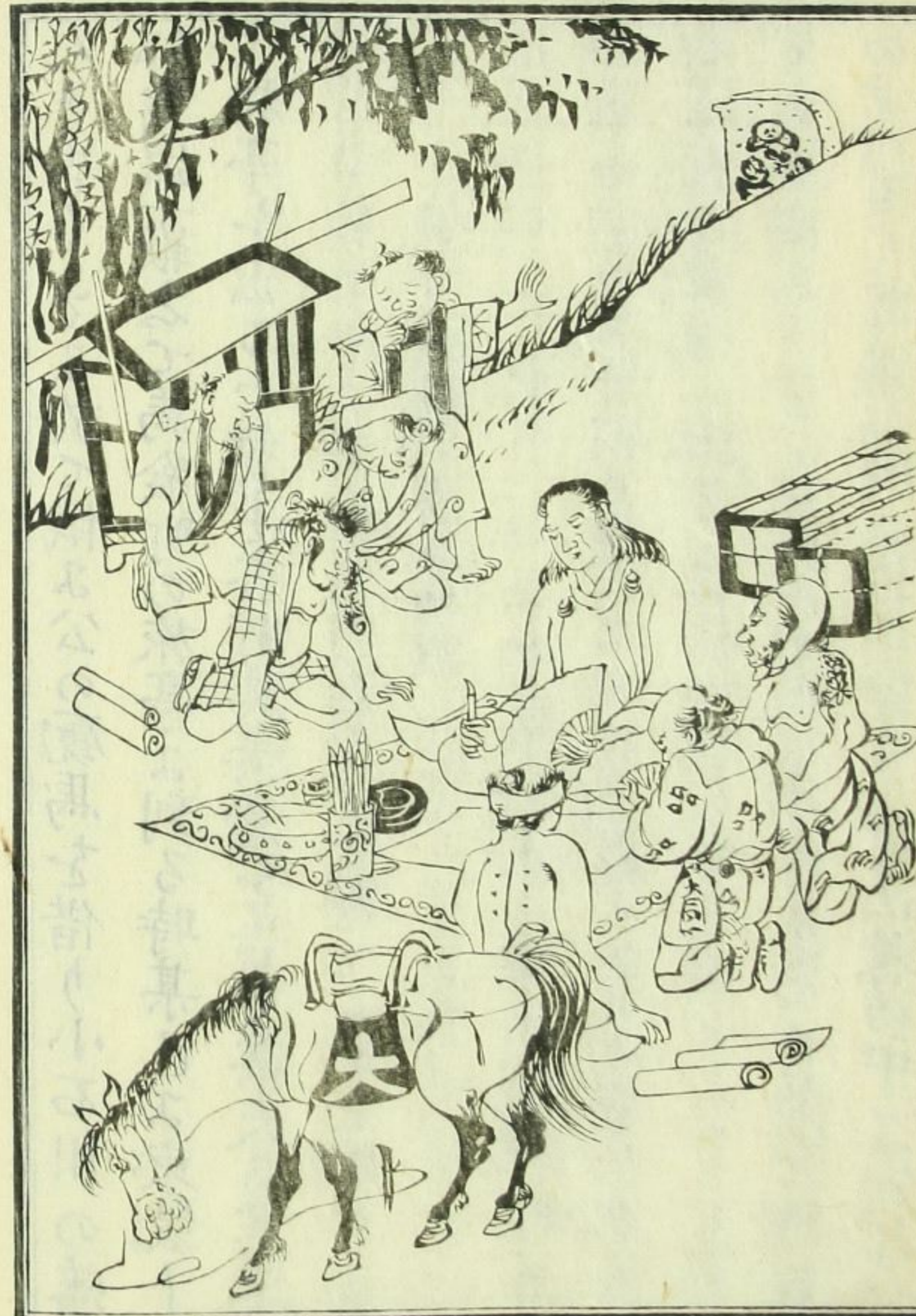
り今助忽訝りを生ト強て其説を問み杏所曰余これを
熟視するも此人魚其面を猿の胎兒みて身ハ鯉也頭尾接
する所も其鱗を挿てこれを作る也今助未信せむ杏
所曰偽物ぞ知るこれ哉存する哉欲せざらば碎て其真
を判すべし今助忽これを取て地ニ擲つ人魚の全身片
段をちりて四方ニ飛び唯一の桐の木の真棒をとくむる
のく今助始めて其活目も服まると云

○上毛の人真下某江戸よ來て明人陳子和の畫ける狼
の圖幅を買得たり杏所これを聞及て見んと欲せ然も
官務忙劇いまご意を果さば忽人あり某急み歸國せ

んと告ぐこてよ於て俄み公の廐馬を借り小石川の藩
邸哉出一鞭志て馬喰町の旅亭に到る時某己も束装し
て旅亭を出る小會を杏所其素意を告ぐ某大に其志
の厚哉感ト遂に束ぬる所の行李を解てこれを眎まると云

林下展壇 春木南湖

春木南湖名ハ鯉字ハ子魚烟霞釣叟と號し通稱ハ門弥
を稱せ曾て上野國に遊の日途中乍數人ありて路を遮る
皆破衣垢裳或ハ胆或ハ素裸便輿を居て迫てこれに乗ら
しむ南湖おもへらく是必山賊なりや然ども是を避る
のすべからず其為に所を任せ既りて山林の中ニ到れば



林中子氈をのべ筆硯を連まて畫をかくべき設あり衆
 こち頭を垂て曰我輩先生の盛名を聞く久し然き共
 馬夫輿丁此輩よて迎へ接するの席なく又潤筆の資も
 ち今如斯するものハ真に先生の揮毫を冀みあるもの
 也南湖意始て解て曰余元より藝に遊もの也揮寫何の
 勞らあらんと輒毫を採て畫を作て衆も何ふ終に馬
 夫ハ馬棧牽輿丁ハ輿棧昇て道棧送る十餘里其揮寫の
 謝をあまると云南湖この事を人ふ語り終身此奇話やち
 せりや南湖の男南溟この事を余も語りて乃翁此時詩
 あり今諳記せばと云幾程ちくして南溟歿より然る後

余信州長野に遊び西村某所藏の南湖の畫幅をこれバ正に輿丁の為に林中揮寫をなせし圖にして詩も亦記せり趣縮摹してては掲て好事者も示せ又南湖この事を南溟も示て送る所の書札も添り事長ければ不記詩曰潑皮乞畫或需書數紙描來換竹輿十里囊錢還不費從今猶欲博溪魚

○南湖の主雪齋增山侯曾て南湖の為に費用に資を與へて京坂及長崎に遊りむ蕪葭堂を師とす又清客費西湖に會して多く繪事を問又家も明の翟雲坪の畫帖一冊殘藏に又此法に倣ふ資性疎脱りて規則を不守

酒ハ一滴口に入るといへど能酒中の趣を知り又能酒人と交る詩あり平生の趣を見るも足る也詩曰朝出山雲夕宿雲山雲無意我如雲山雲堆裏雲邪我細見雲容我亦雲天保十年八月一して卒す時輩谷文晁畫名大に震る南湖亦聲價あり當時南湖文晁を并て天下の二老と稱す又俳句の自畫讚をよむ花ハ今芳野ハともども偶田川

方功安道 飛彈守惟久

飛彈守惟久後三年軍記の圖を作る人争ひこれに摹し世に傳ふ其圖中載る所の甲冑其他器械屋宇門墻等一として詳審ならざるなり後人これを珍とせ故實を唱

多る者專_ラ當時の考証とるは晉時戴安道南都賦の附圖を作る陳留范宣其畫中前代衣冠宮室人物鳥獸艸木山川具せざる無く一明証あり徵考あるを去り躍然_ヤして喜び曰畫の世も益ある如此_ヤと惟久亦東方の安道と道ふべし

比_ニ妙_ク黄_ニ筌_ニ 圓山應舉

黄筌鳥雀を八卦殿に畫く白鷹認て生物やちりて奮_ニ翮_ニ制する不能_ニこれを縦_ニてハ直_ニみ殿_ニ入_テて其畫く所の翎_ニ羽_ニを搏_ツつ此事益州名画録并ニ聖朝名画評よりて文は異同あり歐陽炯これ_ヲ為_シ奇異記を撰_リて其妙を歎美せり圓山應舉曾て鷄を祇園社頭

の神樂堂に畫く一猫來て蹲_ソ窺_キこれ_ヲ迫_ルこれより應舉特_ニ名_ニ成_レ得_テりこの事多く人の話柄やなま_ニと雖_モい_ハ何等の書中_ニもみる事_ハ今此記を作りまほ_ク其規模を弘むるハ余も亦應翁の為_ニ一歐陽炯を為_シ應舉字仲選通稱ハ主水其先丹波西條の人京_ニ入_テて石田友汀_ニも學_ビ然_シ出_シ藍_キ稱_ス終_ニ一_ニ家_ニ此祖_トをちま_リ寛政七年卒を齡六十三

○興近時祇園よりりくる_ニ鷄_ノ畫_ニ神樂堂中_ニみ_ル今ハ神庫_ニも収めて秘藏_スと云興嘗有作_シ畫_ニ鷄_ノ飲_テ啄_ス與_ニ真_ニ倅_ニ猫_ノ子_ノ窺_レ來_ニ勿_レ忍_テ注_シ眸_ニ八卦殿頭_ニ還_テ此見_ル黄筌未_レ死_ニ在

雅俗石學通記 卷之十一

靖州

馳譽萬里 鞍作部鳥

七大寺記曰法隆寺金堂壁畫尤神妙也。是鞍作部鳥の所圖也。近頃英人薩道氏和州に遊び此壁畫を觀て歎し曰紙の何らざる結ぶ非ば木は非ばして土に畫く者千載を経て猶生るが如く存する物宇内此類あるなりと賞む。鞍作部氏當時神妙を以て稱せられ今又譽を萬里の外に馳せ技藝小ちれ共豈勤めざらんや。興南都にありて鞍作部氏作れる須彌塔下乃十二塑像を以て大に其妙を感ず。唐の楊惠子吳道子等ともに畫を學び其技の上

に立難きを知り畫を捨て專塑像を作りて終に道子と名をひとしくす。鞍作部ハ千古の人ありて楊惠子よりも時代やと上よりあり本邦の塑像も早く此時に開けりぞ見ゆ

傳美千年 染殿后

染殿后ハ忠仁公の女文德帝の后よりて名ハ明子其畫く所の白菊星霜七百年経て豊太閤偶これを得て潢装を加へ屏風とぬ飾るよ金銀を以て殊に愛翫せしや云興曰上古の畫多くハ佛說法語よかりて大方觀音不動の類のみ其風流賞するよ足るもの幾希也。皇后

雅俗石門画記 卷之上

獨早く此隱逸花を寫して名を後世に知らる豈馨香のら
すや

僻意嫌嫁 小池池旭

小池池旭初紫雪と云加賀の人也江戸に在て大沼枕山
の義妹と成る畫を以て諸國を遊歴に性嫁を厭ひ終
身醜せむ往く男を厭の僻甚く旅次の間と雖其室外に
注連繩を張て男子戎室中に入ら免は旅亭の主人も其
偏僻に困は曾て平安に遊び京守護職會津侯松平肥後守
招めし侯の館中にあり會辛辰の戦起り夫より侯の會津に
赴くに従て行會藩王師に抗する事當る兵卒たらば童隊女

隊を設て防戦を志し池旭此募り應じて女隊に入長刀
を振ひ出て戦ひ遂に官軍に獲らる既ち刑せられんとす
池旭自演く曰余素來會津の臣にあらば帝都漫遊の
一畫史也時侯に従ひ奥州に下る皆勢止むを得の所致
也素より王師に抗する物ならんやと實を吐て是を訴
ふ官軍其畫史たるを疑ひ陣中に延て畫を試るに果て
畫を能く官軍心解け許して之を放つ再遊歴して參州
豊橋に至り病で旅亭に卒に池旭元江戸八丁堀に寓せり興
其際一宴席にて同坐し或人酒杯を舉て酌を池旭に乞
ふ池旭曰人の為に酌哉取る者非ばと卒然立て坐を

移以明治十一年卒して歳五十五

○或人曰池旭一時千種有功卿の妾となり國歌を卿に學ぶと歌あり 摘を免く目み餘れと百艸の花の一枚捨ぞおねつる人頗る合調と稱は此妾と成りし説本文と鉾楯に未真に然るや否を知らば

傲志撰婚 櫻井秋山

櫻井秋山名ち雪傑字ハ桂月櫻井雪關の女ありて江戸此人也畫ハ其父に學て山水人物等を能く高壁巨障をかくみ尤工を云世人稱して丈夫も一步を譲るべしと云或人曰秋山容貌甚醜每事丹青の技に矜り自見る

甚高し一宴中酒酣ちる時秋山曰海内真に我に配すべきの男何るゆしと傍人卒爾に曰海内亦君の如き醜女を娶るべき男ある事無あるべし匹無き哉以て深く患を為なるれ秋山大に愧つと云

孽冊上廁 土井繫牙

土井有恪字ハ士恭繫牙を蹄を勢州津藩藤堂和泉守此儒官也性磊落不羈して學ハ齋藤拙堂に受文章を以て世に名あり又墨竹を能く軀幹肥大なり一夏の最暑を畏る夏日ハ裸體を以て常をち客あれど衣を著ば廁に行ふ坐中紙ちる時ハ机上冊子の餘白を撃て之に充つ晚浴

必妻や槽を同らひ或畫戔こふ者席ふあるま當りて廁より出て紙小跨て揮寫に餘便滴して紙上戔點汚く墨暈痕をちまて畫をこふ者駭然面色沮む勢牙少も頤及ハ其小節子拘らざる概如此然とも史を談し文を論じるま至てハ雄辯縱横誰奪て何るを得むと云紀の高野山小僧大鵬畫く處の墨竹の横卷を藏に勢牙竹を畫くハ此圖ハ子よりて習熟すと云女二人あり揮寫の際ハ必待坐し墨を摩し筆を洗て補翼戔ちまると云

開扇代禪 櫻間青涯

櫻間青涯其性物子拘泥せし真率無我本多侯中務大輔子仕ふ

貧尤甚し畫を華山小學ハ殊ハ其真子迫る椿山ハ友と善し椿山一日青涯を訪て其戸戔敲くハ戸内ハ今日不在と云其聲正ハ青涯也椿山恠て潜ハ其戸内を窺へハ裸體を以て獨坐せり傍一の衣類有をハ椿山意ハ此故也と戸外を見まハ一單衣洗濯して竿頭ハあり椿山其衣ハ觸て試るハ己ハ乾ハり頓て其衣を取りハ少く障子を穿て之を内ハ投ハて曰兄かくても猶不在ハなりや否やと言て又戸内を窺へハ青涯立んとするハ禪者ハ側ハの扇を取て臍下戔覆ひ進で衣を取て之を著し呼曰青涯家ハあり

○青涯畫を作るハ一の文房具ハ僅ハ筆硯あるハの

雅俗石亭山記 卷之七

興の友服部波山弱齡の時櫻間の家子到てくる小醬油樽を兩邊に置いて脚とちり上り雨戸をのせ之を甌をき机に替て畫をのく室中疊席ぬく空米苞をふき賓主共之に坐に毫も愧色ぬく出て遊ぬ小晝夜を辨せぬ酒を飲み限りちり時く出仕の時我違へ或門期を過るを以て毎時法の為小幽閉蟄居せらる然れども人其無我哉愛して惡者ぬくと云

累歲隱几 皆川淇園

皆川淇園名も愿字ハ伯恭鴻儒也其父賞鑑を能く元明清の名蹟に遇へば淇園をく之を謄寫せしむ淇園之小

因て其格を得て山水及び雜圖を作る時小應舉月溪岸駒の輩と相交る然れども其結構竟小時蹊小墜らば居常小几小隠て書を讀む月を超へ歳を累て少も其所を離れぬ塾生婢僕洒掃の間とんどもく坐す一日他小行く家人其坐席を視れば拗竄して黒く色づき其腐朽席下の床板も及ぶと云文化四年丁卯七十四に卒す

○淇園父子事へて孝あり父足病ありて轎子のる不能因て官に請て車戔作り僕をく之を引くめ躬自看護して名山勝地に遊行せしむと云

雅俗石馬山言 卷之十一
○竹田曰淇園家子居教授をちりて不仕性豪奢はて講讀の聲絲竹と紛起り時々聲妓を伴ひ鵝水の上は縦飲り學ハ一家をちり著書積で身小等一山水蘭竹を畫く縱横恣逸書卷の氣饒一固格小合を不求其人を以て貴と為也

多年杜門 徐夙夜

徐夙夜本姓も青木名も俊明蹄ハ春塘畫哉池大雅は學び先師没後其舊趾する東山の太雅堂に住り門を杜ぢ傭書して口哉糊を草樹除るに階庭掃はざるもの殆十年翳然世間と隔る人罕小其面哉見る竹田曰池大雅

没後世間翁の逸筆哉撫一拙を藏一捷を取る其徒洵小繁一獨夙夜密を以て長を見せ正派を應舉吳春鷹揚虎視の際小傳ふ偉ゆるのみ

睡者無答 吳春

吳月溪本姓ハ松村名ハ春字伯望性瀟洒酒を嗜み酣酔興小乘ずれば揮洒す或ハ書を題して人小與ふる小その知る人と知らざる人と哉別とび志るも惜む色ちり一曰其友柴田義董來る水墨酒瓶の圖を寫し并て酒徳頌を題書して之小與ふ其妻詰て曰貴戚豪族囑する所の畫未成紙絹積て山の如一家計之が為小貧窮良人之を

顧_レて志_レて何ぞ無用の筆紙を費やや月溪笑て答へば
肱を曲げ睡みつく

○頼山陽二老の評あり曰圓翁是哉寫真と云未_レ_レ_レ_レ之
哉畫や云べ_レ_レ_レ_レ_レ吳叟ハ寫真の外筆墨あり致韻あり
畫と云べ_レ田竹田曰茶山翁の月溪_レ於る終身稱賛愛
許して不措と

○月溪嘗て攝洲吳服の里_レ住_レ是より吳を姓とち_レ
初畫哉大西醉月_レ學_レび後蕪村を師とす蕪村没_レて業
を應舉_レ受んと請ふ應舉之を辭して莫逆の友とち
ま_レと云ふ文化八年七月卒_レま_レ歳五十一



天明名家真像中
所載

皆川淇園

吳月溪

死人不言 司馬江漢

司馬江漢名峻字君岳春波樓と號す江漢の時洋畫
 いまぞ開けむ蘭人僅に外科醫法を傳ゆるのみ獨江漢
 始て洋畫を學び銅板の畫を製す後世洋畫の盛ぬる詭
 小江漢を先學者と為也江漢曾て事故ありて偽り已スか
 死せりとあて芝某町に潜居す或人途上りて江漢の
 後背を見追て其名を呼江漢足を逸して走る追もの益
 呼て接近甚迫る江漢首を回し目を張て叱して曰死人
 豈言哉吐らんやと再顧して復走ると云

今古雅俗 石亭畫談初編卷之上終

